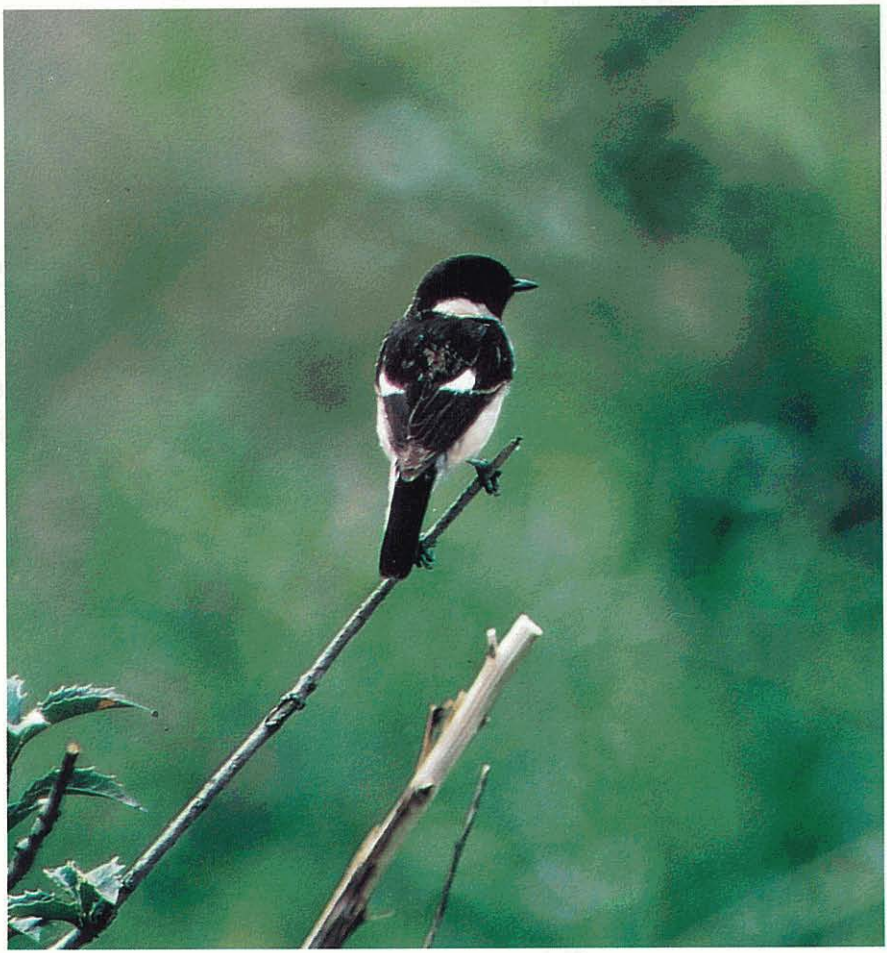
▲　ヤツガシラ（ヤツガシラ科　旅鳥）

冠羽(かんう)のある独特な姿や色彩は、一度見ると忘れることのできない鳥です。かつては、たいへん珍しい鳥でしたが、近年県内でも繁殖が確認されました。熊野町でも繁殖するようになるかもしれません。



▲　ノビタキ ♂（ヒタキ科　旅鳥）

春と秋の渡りの季節に見られる草原性の小鳥です。夏羽と冬羽では種類が違うほど羽の色が違います。ノビタキは「原野」の環境にぴったりの鳥ですが、熊野町でも、そのような広い農地や草原は少なくなっています。

▲　エゾビタキ（ヒタキ科　旅鳥）

9月から10月にかけて見かけられます。 枝先から飛び立って同じ枝に戻ってくるという行動をよくとります。これはフライングキャッチといって、ヒタキ類によく見られる餌のとりかたです。

▲　ニホンアカガエル

平地にいるカエルで、町内では周辺の山よりの水田でヤマアカガエルと同じように1～3月頃産卵します。赤茶色をしているので一般にアカガエルと呼ばれています。

▼　ヤマアカガエル

山地に多いアカガエルで、1～3月頃、池、沼、水田、溝などに産卵します。背側線が耳の後ろで切れて、背中に曲がり後方へ向かっているのが特徴です。

▲ タゴガエル ♂(上)・♀(下)

町内のきれいな流れのある谷にはほとんど生息しています。4～5月頃、石の下や土の中で鳴いているのは、伏流水の中に産卵するからです。

▲ トノサマガエル

日本でカエルといえばこのカエルをさすくらい、なじみ深い水田のカエルです。産卵期以外はほとんど草むらの中などで生活しています。

▼ ニホンアマガエル

町中から山地までどこにでもいます。吸盤で木や草の葉に止まり、雨の降る前に大きな声で鳴きます。体の色は、まわりの色によって、黄緑色から灰色まで変わります。

▲ シュレーゲルアオガエル

よくモリアオガエルと間違えられることがありますが、このカエルの方が約1カ月早く水田の畦(あぜ)や土くれの下などに、白い泡状の卵塊(らんかい)をつくります。モリアオガエルは木の枝先に卵塊をつくるので注意しましょう。

▼ ウシガエル

たいへん大きく、牛に似た声で鳴きます。食用として北米から輸入されたものが野生化しました。近年、池や沼などに広がりふえ続けています。

▲ ブチサンショウウオ

体色はナス紺(こん)で銀灰色のまだら模様があります。湿り気の多い山地の森林内に生息し、4月頃、川の源流附近の石の下や伏流水(ふくりゅうすい)の中に産卵します。

イモリとヤモリ

イモリは井守の意味。カエルなどの両生類の仲間で、主に水中生活をします。ひふにウロコがなく腹側に赤い模様があり、卵は水中に産みます。ヤモリは家守の意味。ヘビなど爬虫類(ハチュウ類)の仲間で全身にウロコがあります。指は裏の横ヒダを吸盤のように使い、窓ガラスなどをはい回り、卵は地上に産みます。

シマヘビ（ナミヘビ科）▶

全長40～150cm。普通に見られるものは1m内外です。体には4本の黒色の縦条があります。町内で見られるヘビのほとんどはこの種類です。活動的で気が荒く、すぐに攻撃ポーズをとりかみつきにきます。熊野では「シャカオ」と呼ばれています。

シマヘビ〈黒化型〉▶

カラスヘビと呼ばれる、真っ黒なヘビがいますが、これはシマヘビの黒化型です。

シマヘビ〈幼蛇〉▶

シマヘビの幼蛇には、赤かっ色の地にアズキ色のはしご模様があります。成長につれ模様がうすれ、2年位で成熟します。

▲ ヤマカガシ（ナミヘビ科）

全長40～150cmで、普通に見られるものは60～80cm前後です。町内の田畑や山林で比較的よく出会うヘビです。マムシほど知られていませんが、毒ヘビで、死亡例もあり注意が必要です。

▼ ニホンマムシ（クサリヘビ科）

全長40～60cmの毒ヘビです。普通は茶かっ色の地色に、銭形（ぜにがた）模様がありますが、かなり変異があります。性質はおとなしく動作ものろいため、積極的に人を襲うようなことはありませんが、注意が必要です。

▲ ヒバカリ（ナミヘビ科）

全長30～60cmで、性質の大変おとなしいヘビです。名前の由来は「かまれたら、その“日ばかり”の命」と言うことですが、実際には毒はなく、めったにかみつくことはありません。

▼ アオダイショウ（ナミヘビ科）

全長50～200cm。普通に見るものは1m内外ですが、大きくなると2.5mにも達します。町内で一番大形のヘビです。よく農家などに住みつき、熊野では「ヤミシロ」と呼ばれています。住む場所が減ったためか年々、数が少なくなっています。

▲ オイカワ ♂（コイ科）

オイカワは川の中下流域を代表する淡水魚です。繁殖期の雄は婚姻色が美しく現れます。熊野では、むかしからハヤとかアカモチと呼ばれています。熊野町の河川では、オイカワやカワムツの数が多くなっています。これは、河川改修が進んで川が平坦化し、瀬が多くなったためです。

オイカワの産卵（コイ科）▶

産卵期は6～8月で、少し流れの速い瀬で行われています。雌が産卵する所を決めると雄は雌に寄りそい、体をくねらせヒレを震わせながら精子をかけます。それによって砂が巻き上げられ、雌の体は砂に埋まり、同時に産卵します。

カワムツの産卵（コイ科）▶

オイカワと同じような環境に生息し、産卵期や産卵場所もよく似ています。写真は、まわりにいる雌が産卵された卵を食べているところです。自然界の厳しい掟(おきて)のひとこまです。

◀　**川の環境**

熊野町を流れる二河川の川岸です。このような環境ではいろいろな種類の生きものが生活することができます。

◀　**ヨシノボリ（ハゼ科　ルリ型・陸封型）**

体長3～4cmの小さな魚です。むなびれの基部にあざやかなルリ色の小斑(しょうはん)があります。ヨシノボリは河川で産卵し、孵化(ふか)後まもなく海に下り、ふたたび溯上(そじょう)する生活史をもっていますが、ルリ型は海に下らなくなった型です(広島県初記録)。

▲ アゲハ〈ナミアゲハ〉
（アゲハチョウ科）

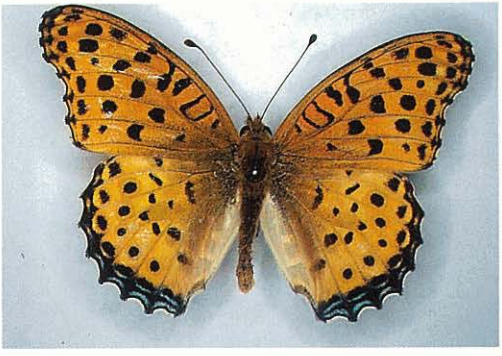
カラタチ、ユズ、サンショウなどに産卵します。人の目によく触れるチョウですが、近年どうしたことか、数が少なくなっています。

▲ キアゲハ〈標本〉（アゲハチョウ科）

日当たりの良い山頂、草地、畑、川土手などでよく見られるチョウです。幼虫はセリ、ニンジン、パセリなどセリ科の野菜を食べます。

▲ ツマグロヒョウモン ♀
（タテハチョウ科）

ヒョウモンチョウ類の中では多化性です。開けた草地、畑地などで多く見られ、人家周辺の花などにもよく訪れます。幼虫は、熊野町ではパンジーを食べていました。



▲ ツマグロヒョウモン〈標本♂〉
（タテハチョウ科）

熊野町では他にヒョウモンチョウの仲間として、ウラギンヒョウモン・ミドリヒョウモン・メスグロヒョウモンなどが確認されています。

▲ ゴマダラチョウ（タテハチョウ科）

食樹の附近を活発に飛び回ったり、葉上に止まっているのが多く見られます。また、成虫は樹液などによく集まります。幼虫はエノキの葉を食べます。冬に大きなエノキの根元の落葉を調べると越冬中の幼虫を見つけることができます。

▼ アカタテハ（タテハチョウ科）

草地、林道、山などで広く見られ、活発に飛び回ります。時折、日当たりの良い路上や石垣で羽を開いて静止しています。成虫で冬を越します。幼虫は、ヤブマオ、カラムシなどを食べます。

▲ ベニシジミ（シジミチョウ科）

日当たりの良い草地、休耕田、畑地などで多く見られるシジミチョウで、成虫はいろいろな花を訪れ吸蜜をします。幼虫は、スイバを食べます。

▼ ゴイシシジミ（シジミチョウ科）

ササや竹などの多い周辺で見られ、日陰の方が多いようです。裏面の黒の斑点(はんてん)が碁石(ごいし)のように見えることから名前がつけられました。チョウでは珍しく肉食で、幼虫は竹につくアブラムシを食べます。

▲ ヤマトシジミ（シジミチョウ科）

人里近くの荒地や道端などでよく見られます。春から秋にかけて、好天の日には庭のカタバミなどに飛来し吸蜜しています。幼虫はカタバミを食べます。

ルリシジミ（シジミチョウ科）▶

町内では、普通に見られ飛び方も活発で、いろいろな花を吸蜜のため訪れます。夏には湿地に飛来して吸水することもあります。幼虫はフジ、クズなどの花やつぼみを食べます。

▲ アサギマダラ（マダラチョウ科）

南方系の大型のチョウです。飛び方はゆるやかで羽を開きグライダーのように滑空し、驚くと見えなくなるくらい空高く舞い上がります。長距離の渡りをすることが知られています。

クロコノマチョウ〈標本〉 ▶
（ジャノメチョウ科）

南方系のチョウですが、温暖化のせいか近年、確認された報告が増えています。薄暗くなって行動をするため、姿を見ることは少ないようです。幼虫はジュズダマを食べます。